

クロンシュタットの叛乱について、その外的な情勢と内的な要因が正しく把握されていたと思う。

水兵という階層構造の下底にある人々、そして農民や労働者の出身者で、現在日本の自衛隊の兵士や水兵にあたるような人々が、叛乱せねばならなかったこと。

叛乱によって起り得る外国の干渉を意識していたこと。叛乱以前はレーニンたちを助けて革命に大きく貢献した人々だったこと。そしてその中にはアナキストとして自他共に認められた人々は至って少なかったこと。

その叛乱宣言の中に見られるものは決してアナキズムに立脚してのものでなく、要求も極めて一般的なもの、むしろエス・エルの主張に近いものであったこと。

しかしその叛乱が水兵の自然発生的な合意によって起った点において、経過と形においてアナキストチックだった。叛乱の時期が氷結期でもっとも不利なときで、そのために政府の鎮圧には有利で、政府は総力をあげて短期に解氷前に鎮圧したこと。この叛乱が綿密に計算され計画されたものだったら、この時期には起り得なかった。

この叛乱は革命の成功と同時に、アナキストやエス

エルそして革命に挺身した農民、労働者を弾圧し、国家体制を整備維持する方向をとったレーニン、トロツキー等の官僚主義に向けられたものであること、このことは人間存在の要求、精神的更新の要求を含むものだとしたこと。

民衆の要求によって起る革命は、いつ、どこで、どのように起るか予測できないものであり、そしてその革命はクロンシュタットにおいて、それが最初から不利な絶望的なものであっても、ひとつの個のために全世界でも犠牲にするとはいったマラテスタのような態度において遂行されねばならない。

以上は信太君が語ったことの概要を僕なりにまとめただけで、いろいろ問題点を含んでいると思うのだが、話の後で質問も少なかったのは意外だった。後で若い諸君に、何故だろうかと聞いたら、ああいった会でそんなことはあり得ないと一蹴されて、落莫とした感に打たれた。この集會の前に集った時、この集會について意見を書いてくれるように言っておいた。それが幾つか集ったので一緒に発表する。これによって問題点はどうとらえられたかを幾分か知ることができるだろう。

## クロンシュタット叛乱集會・雑感

流 人

クロンシュタットが、今日有している意義について、それが、「ロシア第三革命の志向であり、永久革命の根源的意義に於ける『革命』の追求である。」という言葉に包摂され遂くすことは、私にとっても勿論のことです。だから、此処でそれについて語りはしません。

ただクロンシュタットが、勝算を度外視しても起たざるを得、そして実際に蜂起したこと。講演者はこのことを、マラテスタの『ひとりの人を救うためには、全世界の法則に背むくことも辞さない』という言葉に関連付けて、非常に高く評価していましたが、此処には、かなり重要な問題が提起されていると思います。

『敗ける戦さと知りながら……』ということはカッコイイし、マラテスタの言葉は美しい。確かに、このマラテスタの言葉は、私にとって美しいし、『大多数の人を救うためには、少数の犠牲はやむを得ない——』という思考を断固拒絶する』という言葉に換言される時、およそ自らをアナキストだと考える全てのの人にとっての、原点だと思えます。

しかしながら、クロンシュタットは、ロシア第三革命

を志向していた。即ち、ロシア革命の原理念を社会的に実現しようとする社会革命を志向していた。そのとき、『敗ける戦さと知りながら……』という言葉で、環結させ得るのだろうか。社会革命が、己れ(達)の信念、理想を、社会的に実現しようとする試みである限り、社会革命は、少なくともその時点に於ける勝利を求めず。(社会革命を志向するとき、『敢えて勝利を求めず』と開き直ることは、自己と、加えて、係わり合った社会に對しての欺瞞であり、裏切りではない。)

クロンシュタットに於いても、人々は決して、『敗ける戦さ』と知ってはいなかった。何よりも、人々は、政府権力との武力衝突を、(少なくとも最初からは)覚悟してはいなかったし、又、今日私達から見ても余りにも樂觀的すぎるにしろ、人々は自分達の極く当然の決議が、当然であるが故に、受け入れられるものと信じていた。言い換えれば、人々は、ボルシェヴィキの良心と、ロシアの、特にベトログラードの民衆の同感と支援とを信じていた——と想う。結局、クロンシュタットは、強いられた戦いであり、突き付けられた刃を、己れの信念

と理想のままに受けて起った。そして其処に、(講演者も強く指摘していた) クロンシュタットの美しさがある。けれども、美は決して生産的ではなす。

クロンシュタットは、己れの革命性を、(ロシア) 革命の原理念に回帰し、それを飽くまでも追求することが、一九二一年という時点で、如何に革命的であるかということ、認識していなかった。それ故に、戦勝・戦術上のいくつかの重大な失敗が生じた。けれど、こんなことは大切なことではありません。

—— ひとりの人を救うためには、全世界の法則に背むくことも辞さない ——

このマラテスタの言葉が、前述の如く、「大多数の人を救うためには、少数の犠牲はやむを得ない——という思考を断固拒絶する」とパラフレーズされる限り、勿論一言も付け加わる余地はありません。しかしながら、マラテスタは敢えて「ひとりの人を救うためには……」と語る。そして其処には、「大多数の人を救うためには……」という言葉にパラフレーズしては認識しきれない何かがあり、恐らくそれは、「ひとりの人」という一句の内に見出されるべきである。即ち、「ひとりの人」とは、まず第一に、「私」自身でなければならぬ。そ

## 野 火

ユートピアの途 マルティン・ブーバー著、長谷川進訳  
前に「もう一つの社会主義」として、われわれを大きく啓発してくれたものの改訂版である。訳者の立派な訳業は前の版でも十分に、われわれにアナルズムについての理解を深めさせてくれたと思う。前の版は貸したままになっていて手許にないので、訳者の苦心がどんなに大きいものだったかは、しのぶことが出来ないで残念だが、題名が原著のものに帰ったように、内容においても真にブーバーの意のある所に肉薄して伝えられることになつていて信じる。表面的な、消化不良なブーバー理解が横行している今日、読者がこの本を手がかりとして、ヨーロッパ思想、さらにその大きな底流となつていくヘブライ思想史にまで深く突込んで、ブーバーを学んでくれることを望まずにはいられない。

X

でいらほん通信、第二号、青ヶ島村、菅田正昭  
柳田国男によって「青ヶ島のモーゼ」にたとえられている佐々木次郎大夫伊信の墓を探した菅田君は、考証と探索の結果ついに、さる一月十五日それを突きとめた。民衆のなかに、民衆とともに、そして民衆がいるから民

でなければ余りに傲慢すぎるから。  
—— 私自身を救うためには、全世界の法則に背むくことも辞さない ——  
全ては此処から始まる。

(未完)

## リバタリアン双書

- ☆政治の正義—財産編— W・ゴッドウイン著 定価400円 円50円
- ☆社会主義の下での人間の魂 オスカールワイルド著 定価180円 円45円
- ☆「大地」誌に発表された 幸徳事件 定価200円 円45円
- ☆フランス人よ共和主義者になりなれば更に努力を 定価250円 円45円
- ☆個人・社会・国家 エマ・ゴールドマン著 定価130円 円45円

東京都新宿区東大久保1の464 第一松喜ビル  
バルカン社気付

衆のために生き、それでいて民衆にも忘られて、それでも民衆の墓地群の中に残っていた墓、菅田君がそれを見つけてくれた。佐々木次郎大夫とともに生きた民衆も、どんなに喜んでくれているだろうか。民衆は永遠だ。

X

ジュリオ・ミラン  
本誌十二月号に報告したが、去る二月十一日マドリッドの軍事法廷はミランに二十年の刑を宣告した。ツールズのONTはただちに抗議集会を開いた。

## サロン・リベルテール

毎週火曜日六時三〇分から  
中央線水道橋駅東南口 喫茶「終着駅」で  
(ウニタへ行く道 右側二番目の横丁に入る)

アナキストのサロン。討論会、おしゃべり、読書会、宛名書き……内容は特に決めません。その時集まった人たちの組み合せやふんいきによって決定されます。コーヒを飲むためにきていいし、みんなが討論のテーマなどを持ってくればなお面白いと思います。

☆ リベルテールを、他の人に見せるのに、どうしても抵抗感がある、という話が、リベルテールのサロンで出た。ようするに、これは大部分の、他のアナキズム関係の機関紙にも言えることと思うが、リベルテールには方向性が何もないというのだ。確かに、事実はそうなのであり、そのことを認めざるをえないのだが、では、その事実を我々はどのように捉えたいのだろうか。問題は二つに分れると思う。一つは、アナキズムが、方向性さえ出せないという状況の中で、アナキズムはどうか、方向性を出せばいいのかということ。もう一つは、方向性が出ていなければ、それを読まない、あるいは相手にしない、という人達を、いったい、どう捉えていくのかということ。それはおそらく、アナキストの主体性にかかわってくる問題だろう。

☆ 2月号で、志賀口さんが、「論理の前に、構想が、そして構想の前に、イメージがある。」と言っているけれど、これは、理論を方向性にかえても、あてはまると思う。現在のアナキズムには、論理や方向性の以前に、イメージそれ自体がないのだ。あるいは、もっと言えば、イメージを作り出す、アナキズムの感性、

情念といったものさえも、ないといえる。まず、この現実を直視しなければならぬだろう。このような、アナキズム運動の惨めさを直視せずに、無理矢理に方向性を出そうとすれば、この数年來、時々見られるような、アナキズムの方向性を提示できたと自負しているらしい人々のように、マルクス主義のイメージ(発想法)に、そのまま依存するしかないのだ。

☆ リベルテールの仕事の一つは、雑誌等を通じて、アナキストのイメージを刺激していくこと、そのような論文を、積極的に発掘していくこと、それらの作業を通じて、アナキズムのイメージを創出していくことだと、僕は思っています。

☆ 結局、アナキストの夢とは何だったのか？夢を失ってしまった現在のアナキズムにおいて、だからこそ、アナキストは夢を求め、そこが、未来を必然性の中に創出しようとする、そこが、未来を必然性の中に消滅させていくマルクス主義から、アナキズムを決定的に分けるのだ。遠い離れ島へ行ってしまった菅田さんもこの夢を求めて行ったのではないだろうか……ブルードン、バクレーニン、クロポトキン、彼らは彼らの夢を追い続けたのであり、我々は、彼らの理論よりも、その夢をこそ、知るべきだろう。(M・S)

☆ アナキズム運動年表 萩原晋太郎著 二五〇円 千三三五円

☆ アナルコ・サンジカリズム 萩原晋太郎著 二五〇円 千五五五円

☆ 社会主義の下での人間の魂 一八〇円 千三三五円

オスカ・ワイルド著 はしもと・よしはる訳

☆ 政治の正義 一 財産編 四〇〇円 千四五五円

ウィリアム・ゴッドウィン著 はしもと・よしはる訳

☆ 科学から自由へ O・マーティン著 遠藤訳 二五〇円 千四五五円

☆ 風雪を越えて 山口健助著 一五〇円 千三五五円

☆ 日本無政府主義運動史 第一編 黒戦社版 三五〇円 千五五五円

☆ 強権主義の解剖 武良二著 二〇〇円 千三五五円

☆ 「大地」誌に発表された幸徳事件 はしもと・よしはる訳 二〇〇円 千四五五円

☆ 無政府主義者はこう答える 岩佐作太郎著 一五〇円 千三五五円

☆ 獄窓から 和田久太郎著 近藤憲二編 八〇〇円 千八五五円

☆ 死刑囚の思い出 増補決定版 古田大次郎著 七〇〇円 千六五五円

☆ 無政府共産主義、人類解放の道 八太舟三著 七〇〇円 千六五五円

☆ A.H.A.パンフ・君高校生？読んでみないか 一八〇円 千四五五円

☆ 無政府主義組織論・無政府主義とサンジカリズム エンリコ・マラテスタ著 復刻版 一〇〇円 千三五五円

☆ 階級闘争説の誤謬 八太舟三著 一三〇円 千三五五円

☆ フランス人よ共和主義者になりたければ更に努力を！ マルキ・ド・サド著 はしもと・よしはる訳 二五〇円 千四五五円

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回 15日発行

昭和47年3月15日発行 Vo. II No. 4

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町 2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京 133830 番 三浦精一)